

3 書くことを生かして、詩歌の鑑賞を豊かなものにしましょう

詩歌教材の学習目標は、詩歌の表現の特徴に注意して読み味わう力や、詩歌に描かれた世界を想像する力、詩歌の表現を味わうことにより言語感覚を磨く力などを身に付けるために設定されることが多いようです。次にその例を示します。

「短歌の世界」(三省堂2年)の学習目標例

短歌に描かれた世界を豊かに想像し、味わう。

短歌のリズムや表現方法などの特徴を理解して、それぞれの内容をとらえる。

この学習目標を達成するために、生徒自身に調べさせたり考えさせたりすることも大切ですが、生徒にとってはあまりなじみのない短歌について、理解を促す「補助プリント」などを用意し、「考えるヒント」を与えることも効果的です。

次に示すのは、鑑賞文の書き方を例示することにより、生徒が短歌の表現に着目して主体的に考え、記述することを促した例です。

「短歌の世界」(三省堂2年)の学習課題例

教科書の十首から、好きな短歌を選び、その情景や心情がどのように歌われているか、読み取ったり想像をめぐらしたりして、鑑賞文を書いてみよう。その際、先生が示した例を参考に、短歌の表現を具体的に「引用して書く」ことを条件とする。

教師からの例示(プリントにして配布)

私が選んだ短歌

「寒いね」と話しかければ「寒いね」と答える人のいるあたたかさ 俵万智

私の鑑賞

「寒いね」と話しかけると、「寒いね」と答えてくれる人がいる。そのあたたかさがなるともうれしい。

このような何気ない言葉の中に、人と人とのぬくもりが感じられる。会話は「寒い」だが、気持ちは「あたたかさ」であるという表現もおもしろい。このようなやりとりができるのは、きっと恋人同士なのだろう。

音読するときは、二つの「寒いね」を、それぞれどちらかが男性でどちらかが女性であることを想定しつつ読むとともに、「あたたかさ」のところを明るくほのぼのとした語感が伝わるように読みたい。

このように、例示のプリントがあることで、生徒は具体的にどう書けばよいかをイメージすることができます。その際に、記述のポイントを教師が分かりやすく説明することが大切です。

例示の説明例

今回は、どんなことを書くのか分かりやすくするために、段落に番号を付けてみました。

まず、では、その短歌の歌の意味を書きました。

次に、では、短歌の中の言葉を引用しながら、先生が想像したことを書いてみました。

では、この短歌を音読するときに心がけたいことを書いたんですよ。

みなさんが書くときには、段落番号は書かなくてもけっこうですが、最初の段落に「歌の意味」を、次に「短歌の言葉を引用しながら感じたこと」を、最後に、「音読するときに心がけたいこと」を書いてください。

このように例示することは、短歌の鑑賞に限らず、俳句や漢詩、古典の和歌などの鑑賞にも効果的です。次に、漢詩の学習で生徒が書いた鑑賞文の例を示します。

生徒の鑑賞文例（「黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る」李白）

古くからの友人が、かすみ立つ三月に、揚州へと舟で下っていきます。その友が乗る一その帆かけ舟がしだいに遠ざかっていき、青空のかなたに吸い込まれるように消えました。

広い長江だから、きっと水平線に消えるように見えたに違いありません。授業では、帆かけ舟の帆の色が何色が、みんなで想像しました。青空に似合う色として白が有力でしたが、黄鶴楼の伝説にちなんで、私は黄色もいいかなと思いました。

この漢詩を何度も読んでいるうちに暗唱できるようになりました。今度読むときは、友人を送る気持ちをこめて、間の取り方をゆったりとして読みたいです。

漢詩の内容を、現代語訳を参考にして、分かりやすく述べています。

自分なりの音読の効果についても述べています。

ワンステップアップ

教科書における詩歌の扱いは、各社とも、短歌が2年生に1回、俳句が3年生に1回用意されている程度です。詩の扱いは教科書会社ごとに違いますが、3年間でわずかに数編を扱う程度です。したがって、それぞれの単元での指導機会を大切にするとともに、日常的な指導において、「教室掲示」や「範読」なども交えて、詩歌に触れる機会を増やすことが望ましいと考えられます。生徒が自ら探した詩歌やその鑑賞文などを掲示したりすることなどの工夫を加えると、詩歌への興味・関心と鑑賞文を書く意欲を継続することができるでしょう。また、単元の扉に詩歌や季節の言葉を載せたり、資料編に詩歌を載せたりしている教科書もありますので、折りにふれて取り上げるようにしたいものです。